【区分】
1. 第1期・初動対応（地震発生後初期72時間を中心として）
1-11. 二次災害・被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
01. 地震による地滑り、土砂崩れの発生、建物倒壊等の恐れから、兵庫県下で52箇所、約77,000名（1月中）を対象とする避難勧告が発令された。当初は情報連絡が混乱する事態も生じた。

【教訓情報詳述】
01) 地震による地すべり、土砂崩れの発生、建物倒壊などのおそれから、兵庫県内では1月中に52箇所77,133名に避難勧告が発令された。

【参考文献】
◇[参考] 兵庫県下の二次災害防止のための避難勧告発令については［『阪神・淡路大震災　警察活動の記録～都市直下型地震との闘い～』兵庫県警察本部(1996/1),p.131］にある。これによると、1月中の避難勧告は52箇所、2,482世帯、77,133名にのぼった。
>
◇[参考] 神戸市における避難勧告発令については［『阪神・淡路大震災ー神戸市の記録1995年ー』神戸市(1996/1),p.205］参照。
>
◇[参考] 宝塚市の市立逆瀬台小学校グランド南側擁壁などにおける二次災害防止のための避難勧告発令については、［『阪神・淡路大震災　－宝塚市の記録1995－』宝塚市役所(1997/3),p.88］にある。

【区分】
1. 第1期・初動対応（地震発生後初期72時間を中心として）
1-11. 二次災害・被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
01. 地震による地滑り、土砂崩れの発生、建物倒壊等の恐れから、兵庫県下で52箇所、約77,000名（1月中）を対象とする避難勧告が発令された。当初は情報連絡が混乱する事態も生じた。

【教訓情報詳述】
02) 現場では、マスコミ報道による避難勧告の情報が早かったり、誤報などもあって、大きな混乱が発生した。

【参考文献】
◆[引用] 2,200人がいる兵庫大開小。…（中略）…テレビニュースが突然、隣のNTTの鉄塔が倒壊の恐れと告げる。鉄塔は75m。その支柱8本中6本に亀裂が走っていた。西に倒れれば校舎を押しつぶしてしまう。避難者が外へ飛び出し、兵庫中、会下山小、水木小へ。お年寄りばかり300人が残った［読売新聞大阪本社『阪神大震災』読売新聞社(1995/10),p.188］
>
◆[引用] 午前中はまだ部屋も静かな状態であったが、午後3時以降、大和地区のガス漏れ情報で、動きが一挙に慌ただしくなる。テレビの誤った避難勧告情報により、住民約4千人が3カ所の学校に急きょ、避難してしまった［『阪神・淡路大震災　川西市の記録－私たちは忘れない－』兵庫県南部地震川西市災害対策本部(1997/3),p.19］
>
◆[引用] しかし、大和地区の「ガス漏れ」が住民の不安を招き、地元自治会を中心に独自のパトロールが行われていたが、「ガス漏れ」に関する情報が北部対策班にも全く届かないことから、地元自治会と東谷公民館で協議を行っている間に、テレビが「避難勧告」を流したため、急きょ開設した3ヶ所の避難所（牧の台小学校、東谷中学校、東谷小学校）のなかでも、牧の台小学校に数千人の住民が避難し、大パニックを招く結果となった。また、災害対策本部並びに北部対策班は、この対応に追われた。［『阪神・淡路大震災　川西市の記録－私たちは忘れない－』兵庫県南部地震川西市災害対策本部(1997/3),p.21］
>
◇[参考] 神戸市立兵庫大開小学校（神戸市兵庫区）・14時、学校東隣のＮＴＴの鉄塔が倒壊する恐れがあるため、テレビ放映で避難勧告が出される。約2,000人の避難者のうち約300人を残して他の避難所や公園等へ移動する。夕方、避難勧告が解除され、避難者が戻り総数は約1,500人になる。・避難勧告にも関わらず学校に残った300人には高齢者が多かった。「鉄塔が倒れる位の余震やったら、どこに逃げても同じや」。［『震災を生きて　記録　大震災から立ち上がる兵庫の教育』兵庫県教育委員会(1996/1),p.120］
>
◆[引用]（神戸市立魚崎小学校）11時頃、避難勧告が出された。ラジオの情報と同時に、警官10人程度が運

動場に入ってきて大声で避難勧告をした。避難先を言わず、ただ逃げてほしいという内容だったので、避難者の多くはかなり切迫した状態だと感じ、あわてて避難を開始した。自力で避難できない弱者は、地元の会社の寮から避難してきていた若い男性20人程が、職員室の椅子を車椅子代わりにしたり、一輪車に乗せたりして運んだ。また、警察の護送車とトラックも利用して、全員の避難を完了させた。[神戸市教育委員会『阪神・淡路大震災　神戸の教育の再生と創造への歩み』(財)神戸市スポーツ教育公社(1996/1),p.64]
>
◆[引用] 金治さんは自らの判断を迫られた。タンクのある東部第二工区と隣の第一工区での避難勧告(第一号)を検討する。車が走るだけでも引火しかねず、着火源の排除を目的とした。午前六時、金治さんは勧告を発令する。
　さらにすぐ、半径約二キロを目安にした範囲に広げる。最悪を考え、一方で「区内で逃げ場を確保できる範囲に」との判断もあった。分かりやすいように道路や川で区切った。「国道2号以南、石屋川以東、十二間道路以西と六甲アイランド」(第二号)で、ファクスを本庁に送り、マスコミへの広報を頼んだ。
　ところが、消防関係には「JR神戸線以南、天上川以西、灘区境以東と六甲アイランド」と範囲が拡大されて伝わった。
[神戸新聞記事「4. 代理発令　想定なき爆発 対処一任」『1995・1・17からⅧ　二日目の震災　避難勧告は伝わったか』(2005/1/21),p.-] ☆

【区分】
1. 第1期・初動対応(地震発生後初期72時間を中心として)
1-11. 二次災害・被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
02. 神戸市東灘区のLPガス漏洩に伴う避難勧告では、住民への指示が十分行き渡らず、避難所が混乱するとともに救出活動などにも影響があった。

【教訓情報詳述】
01) 現場と災対本部の連絡は混乱し、住民への指示も十分とはいえなかった。

【参考文献】
◆[引用] 18日午前2時、周囲のガス濃度が安全値を超えた。午前6時、市災害対策本部は東灘区のほぼ西半分と六甲アイランドの住民に避難勧告を発令。対象は約7万人。しかし、東灘署には避難範囲、発令時間など具体的な情報は入っていなかった。「ガスが漏れて爆発するとラジオで言っていた」「どこまで逃げたらええんや」東灘署には電話が殺到。受付は避難者でごったがえした。発令の30分後、御影公会堂に人があふれはじめた。「どこまでが安全なんや」。区職員に避難住民が詰め寄った。[神戸新聞社『大震災　その時、わが街は』神戸新聞総合出版センター(1995/9),p.116]
>
◆[引用] 震災時、聴覚障害者は被害状況や避難勧告、救援などの情報が得られず、行動できなかったり、遅れたりした。[神戸新聞朝刊『復興へ　第10部(10)情報の保障を訴える‘災害弱者’／テレビに字幕と手話を』(1996/5/30),p.-]
>
◇[参考] この避難勧告に伴う情報混乱の様子については[読売新聞大阪本社『阪神大震災』読売新聞社(1995/10),p.204-205]参照。
>
◇[参考] この避難勧告に関するある避難者の手記が[『災害時における情報通信のあり方に関する研究』兵庫ニューメディア推進協議会(1995/5),p.20]にある。
>
◆[引用] 兵庫県立御影高等学校(神戸市東灘区):避難勧告の情報は、市対策本部からではなく携帯ラジオから収集した。避難勧告によって避難者を別の避難所に移動させる旨を市対策本部に伝達したが、勧告解除の確実な情報もなかった。市に夕方問い合わせたところ、すでに避難勧告が解除されていた。[『震災を生きて　記録　大震災から立ち上がる兵庫の教育』兵庫県教育委員会(1996/1),p.76]
>
◆[引用] (被災地企業アンケート調査)2日目に付近で可燃ガスが漏洩し、一帯に避難勧告が発令された。しかし、対象エリアがはっきりしないので困った。前を通る消防職員に聞いても、「ここも範囲に含まれる」と答える人もいれば、別の消防職員は「ここは含まれない」と答えた。ヘリコプターで広報するなど、生命に関わる情報は徹底して正確に伝えてほしい。[(財)阪神・淡路大震災記念協会『平成11年度　防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域)報告書』(2000/3),p.30]
>
◆[引用] 一九九五年一月十八日午前六時、液化石油ガス(LPG)漏れ事故での避難勧告が発令される。
　「天に祈った」と、当時の東灘区長、金治(かなじ)勉さん(69)は振り返る。余震が続く中、住民にパニックが起きないか案じた。
　報道機関への連絡は、兵庫県警と市災害対策本部に頼んだ。パトカーやヘリコプター、東灘消防署の広報車でも直接、住民に伝えることにした。しかし、情報は錯綜(さくそう)する。
[神戸新聞記事「5. 緊急放送　情報錯綜混乱する現場」『1995・1・17からⅧ　二日目の震災　避難勧告は伝わったか』(2005/1/22),p.-] ☆

【区分】
1．第1期･初動対応（地震発生後初期72時間を中心として）
1-11．二次災害･被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
02．神戸市東灘区のLPガス漏洩に伴う避難勧告では、住民への指示が十分行き渡らず、避難所が混乱するとともに救出活動などにも影響があった。

【教訓情報詳述】
02) この避難勧告によって、同地域内で行われていた救出活動･応急対策活動の中にはやむを得ず中断したところもあった。

【参考文献】
◇[参考] この避難が救出活動に影響を与えたとの指摘が［1.17神戸の教訓を伝える会『阪神･淡路大震災被災地"神戸"の記録』ぎょうせい(1996/5),p.56］にある。
>
◇[参考] 避難勧告により、NTT東灘ビルで行われていた交換機の立ち上げ作業が中断された。［神戸新聞社『大震災　その時、わが街は』神戸新聞総合出版センター(1995/9),p.191-192］
>
◇[参考] この避難勧告により、隣接する関西電力東灘ガスタービン発電所で復旧作業中の4名が避難した。［『阪神･淡路大震災　復旧記録』関西電力株式会社(1995/6),p.133］
>
◇[参考] 神戸市衛生局の記録では、震災当初（1月17日～23日）における神戸市民病院の救急･外来患者状況のうち、東灘診療所の患者数については18日ゼロ、19日4名とされており、この理由としてLPGタンクからのガス漏れによる避難勧告に伴う診療中止等の影響と記されている。［『阪神･淡路大震災　神戸市災害対策本部衛生部の記録』神戸市衛生局(1995),p.222］
>
◆[引用]「ガス漏れで爆発の危険があると聞き、急を要すると思った」と団員の西浦豊さん（56）。自主的に周辺住民に避難を呼びかけた。国道43号を北へ横断する人たちのため交通整理も始めた。さらに団員の大半が、車を北へう回させる誘導をした。
　予定していた救出活動はできなくなった。十七日午後、生存者は既に少なかった。それでも西浦さんは「もう少し助けられたかも知れない」と、今も思う。
[神戸新聞記事「7．救助　発令中の対応検証なく」『1995･1･17からⅧ　二日目の震災　避難勧告は伝わったか』(2005/1/24),p.-］☆

【区分】
1．第1期･初動対応（地震発生後初期72時間を中心として）
1-11．二次災害･被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
02．神戸市東灘区のLPガス漏洩に伴う避難勧告では、住民への指示が十分行き渡らず、避難所が混乱するとともに救出活動などにも影響があった。

【教訓情報詳述】
03) 避難勧告は、LPGの移送開始および警戒体制の整備に伴い1月18日夕刻に一部解除され、最終的には1月22日午後14時30分に全面解除された。

【参考文献】
◆[引用] 周辺住民七万人が避難先から帰宅したあとも漏出が続き、六日間にわたって誘爆発の危機が続いていたことが十七日、明らかになった。爆発すれば、タンクから半径二十キロ以内の市街地が火の海に包まれる恐れがあったとの指摘もあり、住民らは何も知らされないまま危険と背中合わせで生活していた。［読売新聞夕刊『大震災から3か月　タンク誘爆の危機6日間住民知らされず／神戸コンビナート』(1995/4/17),p.-］
>
◇[参考] 1月18日夕刻、避難勧告は一時解除された。県は激しい液状化現象によるＬＰガス貯槽の傾斜や配管の歪みから、余震による2次災害の恐れがあると判断し、職員を派遣して基地内のＬＰガス搬出の監視･指導を行った。その後、安全が確保されたことから1月22日14時25分、神戸市長は避難勧告を完全解除した［『阪神･淡路大震災－兵庫県の1ヵ月の記録』阪神･淡路大震災兵庫県対策本部(1995/7),p.171］
>
◇[参考] この避難勧告の実施状況については、［神戸市『阪神･淡路大震災神戸復興誌』神戸市(2000/1),p.47-49］にもまとめられている。これによると、1月18日夕方には隣接の安全なタンクへのLPG移送が開始され18時30分には安定した移送状態になったこと、神戸市消防局や応援都市･応援事業所の自衛消防隊による3点セット（大型化学消防車、大型高所放水車、泡原液搬送車）が4組そろって警備体制が整備されたことなどがあげられている。これにより、同日18時30分、一部の避難勧告が解除され、最終的には

22日14時30分に全面解除となった。
>
◆[引用] 神戸・六甲アイランドに住む神戸大学工学部助教授の大西一嘉さん（52）は、島の住民に「1月18日」の危険情報がどう伝わったか、一九九六年末に調査した。自ら“情報過疎”の不安を実感した体験も動機になった。
震災二日目、避難勧告に従った人は回答者の94％にもなる。高層住宅の館内放送で住民が一斉に移動した。ただし、車の所有者の47％が車を使った。大西さんは「車がガス爆発の着火源になる危険性は認識されていなかった」と見る。
避難所は寒く、正午ごろの食糧配給後は帰宅する人が目立った。午後六時、六甲アイランドの自治会は「自主解除」を避難者に告げた。「寒い避難所にいるのは限界」との理由からだった。
[神戸新聞記事「10．自主解除　危険への認識ないまま」『1995・1・17からⅧ　二日目の震災　避難勧告は伝わったか』(2005/1/27),p.-] ☆
>
◆[引用] 東灘区役所では、区長だった金治（かなじ）勉さん（70）が勧告の解除を検討していた。路上で寒さと飢えに耐える避難者が窓から見えた。“自主解除”して帰宅する住民がいるとの報告も受けていた。
「外で夜を迎えるのはあまりに過酷。早く解除したかった」。だが、安全と判断する根拠がなかった。結局、LPGの流れが安定した同六時半、金治さんは「移送の条件が整った」として「いったん解除」を決めた。
移送作業には数日かかる。漏れが止まったわけでもない。しかし、住民には「解除」と伝えられた。複数のラジオ局が「移し替えが終わった」と誤って放送した。・・・（中略）・・・
二十二日午前六時、ついに移送完了。その後、漏れていた元弁をテープで縛った。午後二時半、神戸市災害対策本部は、避難勧告の「完全解除」を発表した。しかし、金治さんは「私は十八日に解除した。その後、本当に状況が悪化したら避難命令を出すつもりだった。二十二日の解除は知らない」と語る。
[神戸新聞記事「10．自主解除　危険への認識ないまま」『1995・1・17からⅧ　二日目の震災　避難勧告は伝わったか』(2005/1/27),p.-] ☆

【区分】
1．第1期・初動対応（地震発生後初期72時間を中心として）
1-11．二次災害・被害拡大防止
【01】避難勧告

【教訓情報】
02．神戸市東灘区のLPガス漏洩に伴う避難勧告では、住民への指示が十分行き渡らず、避難所が混乱するとともに救出活動などにも影響があった。

【教訓情報詳述】
04）避難勧告によって、避難先からの再避難などが必要となった。避難者数が一挙に倍増した避難所もあり、食料物資の確保などのために避難者数を把握することも難しい状況となった。

【参考文献】
◇[参考]（神戸市立御影北小学校）18日6時過ぎから、LPガス漏れによる避難勧告にともない避難者が続々と押し寄せたため、前日の避難者数650人から一挙に2,020人になった。被害のあった講堂を除く全棟を開放したが、1教室あたり40～50人が詰め込まれ、さらには屋の中には入りきれず廊下にまで避難者があふれた。［『大規模災害時における避難所のあり方に関する研究報告書』尼崎市・（財）あまがさき未来協会(1996/3),p.48-49］
>
◇[参考]（神戸市立福池小学校）前日の避難者は2,000人程度だったが、避難勧告が発令された関係で、一時は3,000人を超える避難者でごった返した。［『震災を生きて　記録　大震災から立ち上がる兵庫の教育』兵庫県教育委員会(1996/1),p.29］
>
◇[参考] 東灘区に出された避難勧告であったにもかかわらず、隣接する灘区の海岸も危険だとの誤情報が伝わり、結果として灘区東側の指定避難所で避難者数が増大したとの報告もある。［小林和美・池田太臣・中野伸一「1　神戸市灘区における避難行動の地域的展開」『阪神大震災研究2　苦闘の被災生活』(1997/2),p.42］